

[031]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7434526>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 31, 2026-03-15. Seminar of Educational Sociology
Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studiess Kyushu University
バージョン：
権利関係：



教育環境社会学

2025 年度、「教育環境社会学」は、2025 年度の夏学期に、修士課程の学生や大学院進学を目指す学部生を対象に、月曜 6 限及び 7 限に開講された講義である。講義の形式はディスカッションを中心に進められ、参加者は次週の資料を事前に読み、感想と疑問点を Google フォームで回答した。担当者は、担当する章のレジュメを作成し、皆の感想や疑問点を踏まえた論点を提示した。毎回の授業では、担当者が司会を務めディスカッションを行った。

本講義の教材として使用されたのは、NJ スメルサー著・山中弘訳 (1996) 『社会科学における比較の方法：比較文化論の基礎』玉川大学出版部 である。『社会科学における比較の方法：比較文化論の基礎』は、「比較研究」の意義と方法を体系的に論じた方法である。著者のスメルサーは、比較社会学を単なる異文化の違い探しではなく、社会現象の因果関係や一般理論を明らかにするための科学的方法として位置づけている。書籍は大きく二部構成になっている。前半では、比較社会学の古典として、トクヴィル、デュルケム、ウェーバーの比較方法を分析している。後半では、現代社会における比較方法論の基本問題—分類、測定、因果説明、理論化など—を整理している。

以下に、各回で取り上げられた資料と担当者を示す。

6 月 16 日(月)

担当決め

6 月 23 日(月)

1 章 本書の目的 p.13~ (大久保)

2 章 比較分析家としてのアレクシス・ドゥ・トクヴィル p.19~ (大久保)

論点：

- ・比較において、「国民性」という要因を用いることは妥当なのか。
- ・トクヴィルの「比較」がどのような意味を持つのか、トクヴィルの事例を取り上げたのはなぜか。
- ・比較教育学独自の強みとは。

6 月 30 日(月)

3 章 比較社会学のプログラム—エミール・デュルケムとマックス・ウェーバー—p.52~ (程)

論点：

- ・比較社会学において「適切な比較対象」はどのように定めるべきか。
- ・社会学研究における「主観性」と「客観性」のバランスはどのようにとるべきか。

4 章 デュルケムの比較社会学 p.89~ (出水)

論点：

- ・研究で見出したい本質と、その原因は何か。
- ・定義すること、変数を扱うことの難しさについて。

7 月 22 日(火)

5 章 ウェーバーの比較社会学 p.137~ (宮崎)

論点：

- ・教育社会学的観点から見たデュルケムとウェーバーと、比較教育学的観点から見たデュルケムとウェーバーは何が重なり、何が異なるか。
- ・どのようなモデルを想定しているか。

6 章 分類、記述、測定 p.177~ (市丸、大野)

論点：

- ・「もっとも有効な科学的方法を研究過程自体の体系的評価にふり向けるべき」とはどのようなことか。自身の研究分野ではどのような評価が存在しているか。
- ・各自の研究で、研究手法や調査方法をどのような観点で「妥当」だと説明できるか。

8 月 4 日(月)

7 章 関連、原因、説明、理論 p.222~271. (劉)

論点：

- ・スメルサーは、「どんな方法論的考察も、どんなにそれが技術的であっても、つねに、その中で研究が行われている概念的または理論的文脈に留意しなければならない」(p.271) という結論を提起している。
- ・「比較」について率直に感じたこと。

前半で多く疑問点として提示されたことは、「比較は目的か、手段か」「研究者の主観をどう扱うか」「教育社会学、比較国際教育学等、自らが専門とする学問の固有

性は何か」といった論点である。本書籍では、観察者と行為者の能動性と受動性の次元によってデュルケムとウェーバーの立場を位置付け、彼らがお互いに正反対の位置にあることを示す図が、自らの研究の立場を考えるうえで大いに役立つものになった。それは、行為者としての立場を横軸方向に、受動的行為者/能動的行為者、観察者としての立場を縦軸方向に受動的観察者/能動的観察者として4つの科学的知識の生成のパラダイムを示す図である。受動的行為者かつ受動的観察者の社会学の実証主義の立場をとるデュルケムと、能動的行為者かつ能動的観察者の理解社会学の立場をとるウェーバーが対比されていた。その他、能動的行為者かつ受動的観察者としては、現象学、相対主義、歴史主義があり、受動的観察者かつ能動的観察者として、社会学的唯名論が例示されていた。それぞれのパラダイムには弱点があり、それを克服しようとする方法論的努力に着目された。本書籍で示されていたのは、こういう方法を用いるべきという明確な正解ではない。むしろ、方法論的限界や論理の飛躍である。それに対して、筆者は、相関性と因果性との間の不確定性を克服するには、文脈を統制する努力と、操作変数をパラメーター的定数に変える技法が大事であるなどといった具体的方法をあげていた。

授業後半では、それぞれの研究分野における研究方法や比較をする上での工夫などについて意見を出し合った。そこで、先人の引用をもって根拠とするのではなく、その理論や方法を自分の研究テーマに適用するうえで妥当であるか、結論までの過程に見落とししている他の変数がないかなど、自己の研究目的を明らかにしたうえで多面的に検討する必要性を学んだ。また、すべて取り入れようとするのではなく、自己の研究をいかにシンプルに精練できるかが大事であるという意見や、前提の共有を丁寧に行う必要があるという意見が出た。ディスカッション形式の授業を通して、異なる研究分野や関心を持つ参加者同士が議論を重ねることで、自身では気づかなかった視点や前提を発見することができた。本講義で得られた知見は、今後自身が研究を進めていく上で、理論・方法・実装の関係を批判的に検討しながら、自らの研究課題を明確化していくための重要な基盤になると考えられる。他者との対話を通して問いを磨き、論理を精緻化していきたい。

(文責：修士1年 市丸綾由莉)